ＭＯＯＮ-３『WOLF MEET VAMPIRE』＜１７＞

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＯＯＮ－３『ＷＯＬＦ　ＭＥＥＴ　ＶＡＭＰＩＲＥ』＜１７＞

【Ｎコード】
Ｎ３７１１Ｍ

【作者名】
みづき海斗

【あらすじ】
”エイエン”トハ　ナンデスカ？
”ハテヨ”ノ　ノチ　マデ　アナタ　ハ　ヒトリダッタ　オモイデダケヲ
セオッテ　イク　ノ　デスカ？
秀は吸血鬼（ヴァンパイア）との最終戦に入った。そこで彼が目にしたものは・・・
・・・

現代版吸血鬼（ヴァンパイア）伝説　ＭＯＯＮシリーズ第三段『ＷＯＬＦ　ＭＥＥＴ　ＶＡＭＰＩＲＥ』第１７話です。

『WOLF　MEET　VAMPIRE』<17>（前書き）

・・・　・・・長くてごめんね・・・　・・・（￣¥）。。。
すみません、17話でした（自爆。。。。）→サブタイトルが正しいです。
もう訂正できないよぉぉ！！（泣）

『WOLF　MEET　VAMPIRE』<17>

<17>

月光下、執拗な吸血鬼（ヴァンパイア）の攻撃は尚も続く――

小半時もするとその人数は半数以下に減っていたが、それでもカレンと呼ばれる吸血鬼を筆頭とする5－6人の吸血鬼たちが、未だ秀の目の前にいた。

「こいつらしつこいね・・・　・・・」

さすがの秀も体のあちこちに幾つもの裂き傷を作り、鮮血を滲ませている。

狼男（ウルフガイ）といえども吸血鬼につけられた傷は、そう簡単に癒す事は出来ない。秀は、左頬の血を無造作に拭う。

「いい加減諦めたらどう？狼男くん！」

カレンもその白いドレスを鮮血で染めながら蒼白の顔で微笑む。

「かないっこないって、吸血鬼に――いくらあなたが頑張って私たちの体を引き裂いたって、陽（ひ）が昇って『灰』にならない限り、私たちは『復活』できるのよ。最後の一人さえ生き残ればそれで十分！」

「陽の出か――」

乱れる呼吸を整えながら、左手首のSWOTCHに目をやる。「あと30分か――この季節なら。」

「満月も西の空へ移ったわ。あなたにとっても力の限界じゃなくて？」

「やかましいっ！余計なお節介やかんでいい！」

秀は負けずに啖呵を切った。「陽の出までに、てめぇら全員片付けてやる！」

「その台詞、そのままそっちへ返してあげるわ！」

それから彼女は、背後の少女に耳打ちをし、

「理沙、あんたはお逃げ。そして、また夜が来たらあなたの『血』で私たちを『復活』させて。」
「でも、カレン・・・　・・・！」
不安げな表情を浮かべる、少女。
「大丈夫。私たちは『灰』になったりなんかしないわ。」
カレンは再び秀に向き直った。「陽の出までにあいつを倒して――何処かの『闇』でこの傷を癒してる・・・　・・・」
「・・・　・・・わかったわ、カレン。」
「そんなこと、させるか！」
秀は東の空へ立ち去る少女の後を追おうと、飛翔した。
「させるかっ！」
秀の注意が一瞬、少女へと移った隙をついてバーのマスター風の男が彼の背後に回り込み、その首筋に2本の八重歯を突き立てた。
「うあーっ！」
秀は叫んだ――そして、夥しい鮮血を首筋から流しながら地上へと落下した。
「！やったわ、マスター・・・　・・・！」
勝ち誇った妖艶な笑みを浮かべ、カレンは彼の後を追って地上に舞い降りた。

ざっ・・・　・・・

秀の体は背中から地上に激突した。
「つっ・・・　・・・」
激痛に思わず顔をしかめる。
「どうやら・・・　・・・私たちの勝ちのようね。」
彼の正面に立ち、カレンは言った。「いくら狼男だってそう簡単にその傷を癒すことはできないわ。まして、満月が過ぎ去ってしまった『今』となっては。」
「だまれ・・・　・・・！」

秀は首筋を左手で押さえ、かろうじて上半身を路上に起こした。
「てめぇらなんかに、やられてたまるかよ・・・　・・・・！」
「カレン・・・　・・・・！」
その時、地上へ降り立ったマスターが震える両手を見つめ驚きの声を上げた。
「どうしたの、マスター。」
「見てみろ――この血の凄さを・・・　・・・・」
彼は興奮した口調で言った。「全身に力が満ちてくる・・・　・・・。この傷の回復力はどうだ！」
と、言う間にも秀の牙で傷つけられた全身の裂き傷は、青白い炎と共に次々と癒えていく。
「凄い・・・　・・・・」
カレンは瞳を輝かせて呟いた。「これこそ”月光”の力よ――この血があれば、我ら『帝王』も陽の光も恐れるに足りないわ。」
カレンは秀に向き直って言った。
乞うように右手を伸ばし、
「その『血』を我らにも・・・　・・・・！狼男！」
「――馬鹿言え！」
秀は彼らの”気迫”に思わず後ずさった。「吸血鬼の体がこの『血』の強さに耐えられるわきゃねぇだろ！『異族』の”血”は受付けられねぇだろうが、高貴な吸血鬼一族には――」
「嘘おっしゃい！現に彼の傷は癒されてるじゃない、あなたの”血”のお陰で！」
「一時的なものだ！そのうち、俺の血に耐えられなくなってその”身”は崩壊する・・・　・・・・！」
秀は両肩で荒い呼吸をしている。
首筋から流れるどす黒い血が、路上に小さな”水溜まり”を作っていた――
「・・・　・・・・どうでもいいわ、そんなこと！」

「なに・・・　・・・・？」
カレンの、そして”生き残った”者たちの目は虚ろに輝いていた
ーーー
”狂喜”という名の。
「どれだけ長いこと吸血鬼が強い肉体を欲していたか、あなた達には判るまいーーー『高貴』であるが故に『他族』と交わることも出来ず・・・　・・・幾人もの仲間が、陽の下、些細な伝染病の為、『灰』となっていったことを。」
「ーーーー・・・　・・・」
「『永遠』が何だって言うの！？『永遠』の時を『闇』の中で紡いで、いつかその”身”が朽ち果てるのを待てというの？・・・　・・・陽の下を歩くことも出来ず、『永遠』と誓った愛しい人が逝ってしまったその『果て世』の後までーーー」

”エイエン”　ト　チカッタヒト　ガ　イッテ　シマッタ
”ハテヨ”　ノ　ノチ　マデ・・・　・・・

「・・・　・・・だからって・・・　・・・」
秀は哀しげな瞳でカレンを見つめた。
「だからって、『人間』の命を奪うことはないだろ？彼らの命は、あんた達に比べればもっと”一瞬”のものなんだよ。それをーーー”精一杯”生きてる、後悔しないように、”果て世”の後で自分が哀しまないように！淋しくないように！・・・　・・・力一杯！」
「ええい・・・　・・・！世迷い事を！」
カレンは伸ばした右手で秀の首をぐっ・・・　・・・っと握り締めた。
そのまま体を引きずり起こす。
「ぐっ・・・　・・・！」
「貴様とて『闇の血』を受け継ぐ者だろうがーーー人間という、下郎の者の”心”を持ちおって・・・　・・・笑わせてくれるわっ

！」
秀は必死に彼女の両腕を掴み、引き剥がそうとした――口元から赤い血が迸る。
「泣け、喚け――そして我らに媚び、憐れみを乞うがいい・・・・・・誇り高き狼男（ウルフガイ）の生き残りよ！」
「・・・・　・・・・や・・・・だね！」
秀は不敵な笑みをうっすらと浮かべ、彼の顔に血の混じった唾を吐き付けた。
「うっ！」
彼女は思わず、顔を背けた。「おのれ・・・・　・・・・！」
「てめぇらに媚びるんだったら犬っころに媚びた方が・・・・　・・・・
よっぽど・・・・　・・・・まし――――！」
「そう言って、お前の一族は九桜様に滅ぼされたわ――――死ね！
その後に
お前の『血』を余すことなく、喰い尽くしてくれるっ！」

ぐっ・・・・　・・・・！

カレンの腕に最後の力がこもる。
すっ・・・・　・・・・と、秀の両手から力が抜けた。
「――――」
翳んでいく黒曜石の瞳が、もう2度と会えないだろう、青年の姿をなぞらえる。
「・・・・　・・・・和人・・・・　・・・・」
呟く、その名を――

『WOLF　MEET　VAMPIRE』<17>（後書き）

長かったでしょう。お疲れ様です（　）／ペコリ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3711m/

ＭＯＯＮ-３『WOLF MEET VAMPIRE』＜１７＞

2010年10月9日04時51分発行